【自著紹介】山根　由美恵『村上春樹　〈物語〉の行方
—サバルタン・イグザイル・トラウマ—』（ひつじ書房　2022 年 5 月）

本書は筆者の二冊目の村上春樹研究書である。前書『村上春樹〈物語〉の認識システム』（若草書房・2007）では、村上文学を支えている原理、〈物語〉の内実を明らかにしてきた。ここでいう〈物語〉とは、テクストの主題を別の形に変換させて生まれた《寓意性》を持ち、〈内的体験の現実性〉が備わっているものを指す。本書も〈物語〉の内実の討究を目指すが、第一に着目したのは「サバルタン」的存在である。「サバルタン」はポストコロニアリズムの流れの中で「従属的・副次的（存在）」という形で対象を拡大化していった。本書もこの流れに沿うもので、村上文学における「従属的・副次的（存在）」に光を当て、彼・彼女たちの声なき声を拾い、それらの存在を沈黙させている圧力を顕在化させることを第一の目的としている。また「サバルタン」の多くが「トラウマ」を抱え、そのことが〈物語〉を駆動させていることに着目し、心理学の知見から「トラウマ」の内実を追ったことも本書の重要な特色である。

また、本書では「イグザイル」（故郷離脱）期（1988～1996）・「Haruki Murakami」形成期（1997～2019）という区分を設けたことが新しい視座と言える。周知の通り、村上文学は「デタッチメント」から「コミットメント」の変遷があると言われ、「デタッチメント」期 はデビュー（1979）から 1995 年（日本帰国前）までと捉えられている。しかし、日本から離れた場で「日本語」で「日本」を描いた時期（1987～1996： 1987 年からであるが「ノルウェイの森」は前書で扱ったため、本書は 1988 年と記した）は、初期（1979～1986）と区別した方が村上文学をより正確に捉えられると判断した。その上で、「アンダーグラウンド」（1997）以降の村上文学を、「Haruki Murakami」形成期（1997～2019）と規定した。初期や「イグザイル」期においても「コミットメント」の要素が見受けられる点や、グローバルに享受され「世界文学」化していったこの時期は「Haruki Murakami」形成期と名付けた方がふさわしいのではないかと考えたためである。

以下、本書の構成を述べる。第一部「イグザイル」期の文学は、「ダンス・ダンス・ダンス」（1988：以下「ダンス」と記す）、「国境の南、太陽の西」（1992）、「ねじまき鳥クロニクル」（1994～95）、短編集『ＴＶピープル』（1990）・『レキシントンの幽霊』（1996）を対象とした。第一章は、「イグザイル」の模索として、「日本」から逃れたいが、「日本」にコミットもしたいアンビバレンスな意識から文学的昇華が叶わず停滞した「ダンス」、「あるきっかけ」によって復活に成功し、後に『ニューヨーカー』へ掲載され、村上のアメリカ進出への足がかりとなった「ＴＶピープル」という対照的な結果をもたらした二作の分析を行った。第二章・第三章は短編で使用された

「サバルタン」的存在が長編に発展した形で登場し、〈物語〉を動かす様相をモチーフ別に討究し（第二章「拒む女」・第三章「妻」「母」という女性「サバルタン」、「声」を封じられた存在（シナモン））、彼・彼女たちが抱える「トラウマ」の内実を討究した。第四章は短編集『レキシントンの幽霊』の「集」としての戦略―前半は救いがないモチーフ（「癒やされない孤独」）を語り、後半で救いを見出す（「孤独からの回復」）という配列意識―を分析し、「トラウマ」からの回復（喪の仕事）が「集」全体で行われていることを述べた。

第二部は村上の日本帰国後のテクストを対象にしている。第一章は〈地下鉄サリン事件〉（以下〈サリン事件〉と記す）および「サバルタン」的存在に追いやられた〈サリン被害者〉をモチーフにした文学：辺見庸「ゆで卵」（1995）、村上春樹「アンダーグラウンド」（1997）、重松清「さつき断景」（2000）、馳星周「９・11 倶楽部」（2008）、川上弘美「水声」（2014）を対象にし、〈サリン事件〉というモチーフの可能性を討究した。第二章は「海辺のカフカ」（2002）、「１Ｑ８４」（2009～10）、「騎士団長殺し」（2017）と舞台「海辺のカフカ」の討究を行った。これらは村上が Haruki Murakami となって、グローバル規模の読者層を獲得していった時期に相当する長編である。舞台「海辺のカフカ」は村上文学アダプテーションの成功作であるとともに、発展的な想像力によって原作を超える戦争表象が見られた。舞台「海辺のカフカ」のみならず、近年村上アダプテーションの成功作が連続して登場していることから、今後村上文学の可能性を広げる研究領域として重要な位置を占めている。

最後に、本書の討究不足の点を自戒を込めて述べてみたい。まず、「TV ピープル」以降の「イグザイル」意識である。本書では、「ダンス」「TV ピープル」について、「日本」から離れた場で「日本」を舞台とした作品を「日本語」で描くという「イグザイル」の状況下の模索を分析し、「TV ピープル」以降に一段階レベルの上がった「イグザイル」意識となったと判断した。しかし、第一部第二章以降、「拒む女」や「妻」「母」・サバルタンのモチーフの追究が中心となり、「イグザイル」意識での捉え直しができなかった。今後、短編集や中編群・村上アダプテーションの討究を行う予定だが、その際に「イグザイル」意識に踏み込んだ分析を行いたい。

今一つは村上テクスト分析に終始しており、同時代状況・特に村上文学が「世界文学」化したと語られることが多い現在の状況に還元させる眼差しが弱いことである。本書の目的は村上の〈物語〉の討究が第一の眼目となっているため、心理学・社会学等の周辺諸科学の知見を、テクストの解読のために用いている。そうした知見を継続しつつ、同時代状況や歴史的な背景と関わらせ、村上文学が現代文学全体の中でどのような位置（功罪を含む）を占めているかどうかの検討が不可欠と考えている。

【山根由美恵（村上春樹研究、日本近現代文学）】